富山県舟橋村

利田横枕（りたよこまくら）遺跡発掘調査報告

―送電線鉄塔建替工事に伴う発掘調査報告―

２００１年3月

舟橋村教育委員会

序

舟橋村は、県東部・富山平野のほぼ中央にあって、緑豊かで住みよい文化的な都市近郊農村を目指しています。

さて、このたび東芦原地内において、送電線の鉄塔建替工事が行われることになり、それに先立ち、当地域の利田横枕遺跡の発掘調査を平成12年度に実施いたしました。

調査の結果、県内では稀少例となる古墳時代終末期の掘立柱建物を検出したほか、同時期の製塩土器が出土し、村の古代史を知る上で、貴重な資料となりました。

おわりに、調査実施及び報告書の刊行にあたり、富山県埋蔵文化財センターならびにご援助・ご協力をいただいた関係の方々に衷心より感謝申し上げます。

平成13年３月

舟橋村教育委員会

教育長　　藤　塚　孝　雄

例　言

1　本書は、電力会社の送電線鉄塔建替工事に伴う利田横枕遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査区の所在地は、富山県中新川郡舟橋村東芦原89である。

2　発掘調査及び報告書作成は、電力会社の委託を受け、舟橋村教育委員会が主体となり県埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

3　調査期間・調査面積及び調査員は以下のとおりである。

調査期間　平成12年５月29日～同年６月12日　　調査面積　169㎡

調査員　　富山県埋蔵文化財センター企画調整課　　主　任　岡本淳一郎・文化財保護主事　境　洋子

遺構平面図の作成にあたっては、企画調整課係長久々忠義の協力を得た。

4　発掘調査及び出土遺物の注記に用いた遺跡の略号は「ＦＲＹ」である。

5　遺構番号は、種別にかかわらず通し番号を付して、番号の前に種別を表す記号を冠した。使用した記号が表す遺構は、次のとおりである。　SK：土坑（・井戸）　SP：柱穴

6　現地調査及び本報告書に用いた土層の色名は、小山正忠・竹原秀雄　編・著『新版標準土色帖』に依る。

7　遺物整理・報告書作成にあたった作業員は以下のとおりである。（アイウエオ順）

遺物整理：千田友子・高林良衣・堀　真実・横川美雪　　報告書作成：千田友子

8　遺構実測図中にある方位は真北を示し、断面図中の基準線の数字は海抜の高さを表す。

9　本書の作成にあたり以下の方々からご指導・助言を得た記して深謝申し上げる。（敬称略　50音順）

池野正男、斎藤　隆、島田修一、高梨清志、高橋浩二、高橋真実、田中幸生、橋本正春、三鍋秀典、宮田進一

10　本書の執筆・編集は、県埋蔵文化財センター職員の協力を得て岡本・境がこれにあたり、それぞれの文責は各文末に記した。

11　発掘調査に関する記録資料及び出土遺物は、一括して県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　次

序

例　言

Ⅰ　位置と環境……1

第１図　利田横枕遺跡の位置と周辺の遺跡……1

Ⅱ　調査に至る経緯と調査の方法……2

1　調査に至る経緯……2

2　調査の方法……2

第２図　発掘調査地区の位置と区割……2

Ⅲ　調査の結果……3

1　層　序……3

2　遺　構……3

3　遺　物……4

Ⅳ　まとめ……6

参考文献……6

第３図　遺構配置図……7

第４図　掘立柱建物実測図……8

第５図　遺構実測図……9

第６図　遺物実測図（１）……10

第７図　遺物実測図（２）……11

第８図　遺物実測図（３）……12

写真図版

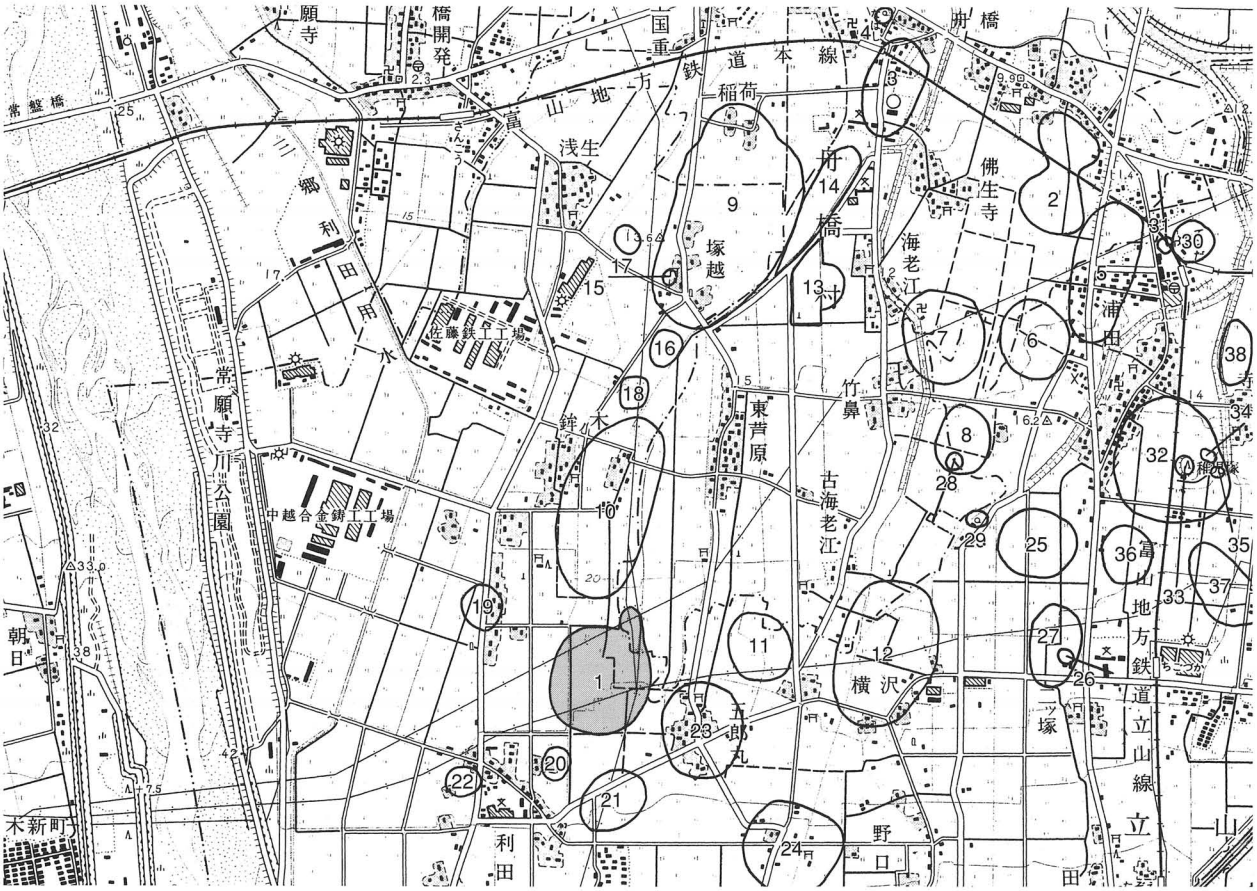
報告書抄録

Ⅰ　位置と環境

利田横枕遺跡は、常願寺川から東方に１kmほど離れた地点に在り、舟橋村の南端から立山町にかけて広がる遺跡である。常願寺川と白岩川により形成された扇状地の微高地上に立地し、現在の標高は22m～25mを測る。周辺には縄文時代～近世にわたる幅広い時期を持つ遺跡が多く所在する。縄文時代早期～後期にかけての集落跡で有名な二ツ塚遺跡が立地するのは本遺跡から東方に約1.5km離れた砂礫段丘上であり、扇状地上になると、調査例は少ないが縄文時代後期の遺物の散布が目立つ。弥生時代に関しては小平遺跡・浦田遺跡・仏生寺城跡で中期～後期にかけての遺物が出土している。古代では本遺跡において集落跡を確認しており［立山町教委2001］、東大寺領大荊荘の比定地に含まれる寺田三十苅遺跡等が東方2.5kmの辺りに所在する。中世の遺跡としては城館跡として古くから知られている仏生寺城跡がある。

今回の調査地区と関連が考えられる遺跡としては、本遺跡から2.5km以内に竹内天神堂古墳・塚越古墳・稚児塚古墳が所在し、北方には古墳時代後期の住居跡を検出した浦田遺跡［舟橋村教委2000］、同じく前期の住居跡を検出した仏生寺城跡（平成12年度発掘調査実施）がある。

なお、今回の調査地点の南方130mにおいて道路の建設に伴い実施した発掘調査では、古墳時代前期･後期の集落跡を確認している［立山町教委2001］。



1 利田横枕遺跡　2 小平遺跡　3 仏生寺城跡　4 竹内天神堂古墳　5 浦田遺跡　6 浦田西反遺跡　7 浦田馬渡し遺跡　8 浦田石田遺跡　9 塚越Ⅰ遺跡　10 鉾ノ木Ⅰ遺跡　11 横沢Ⅱ遺跡　12 横沢Ⅰ遺跡　13 海老江遺跡　14 竹内東芦原遺跡　15 塚越古墳　16 塚越Ⅱ遺跡　17 塚越Ⅲ遺跡　18 鉾ノ木Ⅱ遺跡　19 曽我遺跡　20 利田堀田遺跡　21 利田高見遺跡　22 総曲輪遺跡　23 五郎丸遺跡　24 日水遺跡　25 二ツ塚畑田遺跡　26 二ツ塚経塚　27 二ツ塚遺跡　28 大藪塚　29 前田経塚　30 浦田柳町遺跡　31 大明神経塚　32 浦田前田遺跡　33 稚児塚古墳　34 瓢塚　35 服部塚　36 若林階子田遺跡　37 若林大丸遺跡　38 寺田三十苅遺跡

第１図　利田横枕遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000、『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』より作成）

Ⅱ　調査に至る経緯と調査の方法

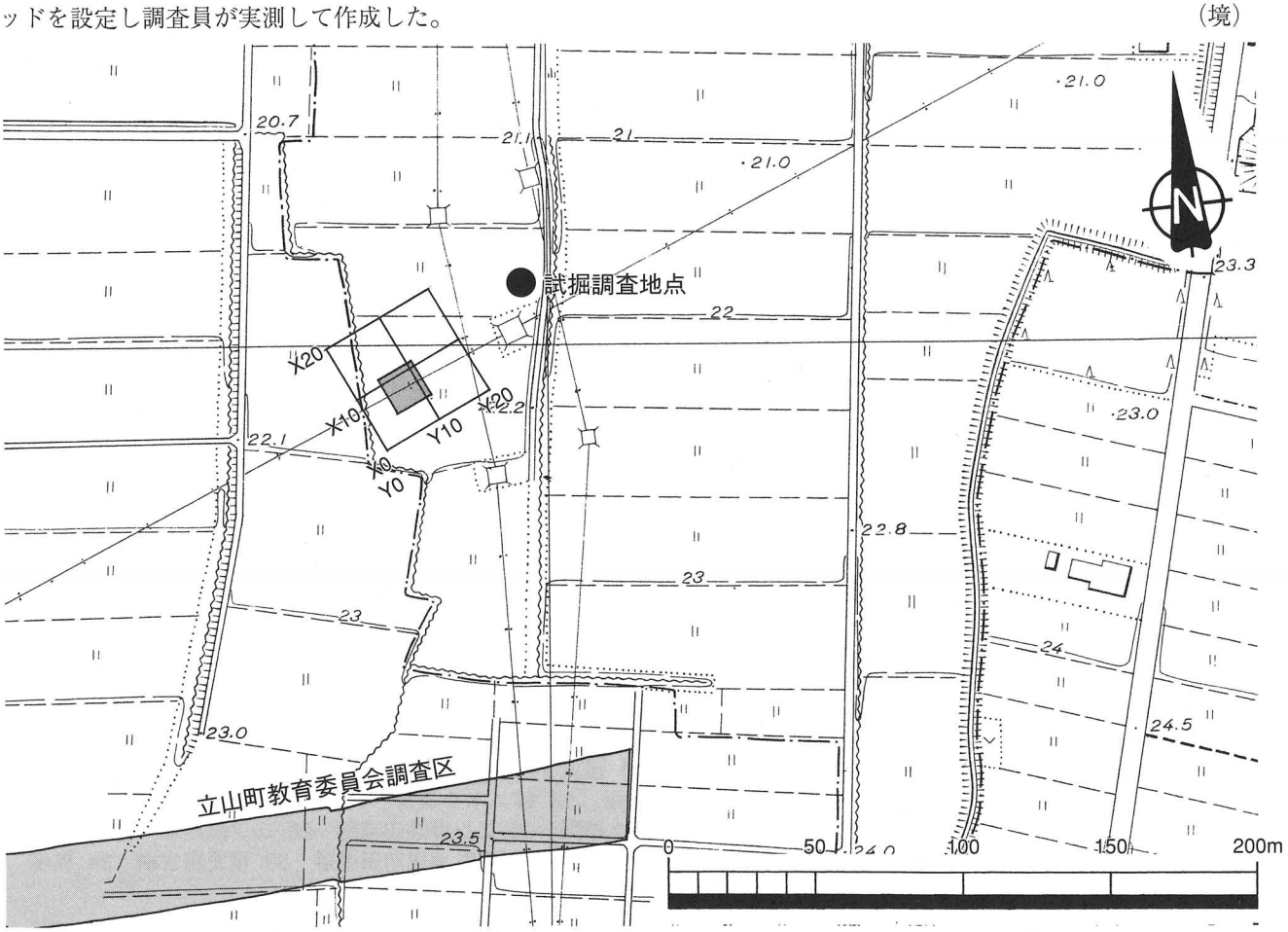
1　調査に至る経緯

今回、発掘調査を実施した地域は２つの電力会社の幹線が交差し、送電線の鉄塔が密に立ち並ぶ地域である。そのような状況の下、平成11年11月と平成12年１月に両電力会社から相次いで鉄塔建て替え工事の計画が村教育委員会に示された。村教育委員会は、最初の依頼があった時点で当該地点が埋蔵文化財包蔵地の隣接地であるため、県埋蔵文化財センターに依頼して現地確認を行うこととした。現地確認は、平成11年11月17日に行い、その結果、遺物を表面採集したため、両電力会社の鉄塔建設予定地点において試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、２箇所の鉄塔建設予定地点ともに平成12年５月16日に実施した。その結果、今回発掘調査を実施した地点において遺物の出土と遺構の存在を確認したため、引き続き本発掘調査に入った。なお、今回の調査地点から北東42m に位置するもう一箇所の試掘地点は田面の高さで１ｍほど低く、若干の焼土を検出したものの、洪水の痕跡が顕著であり、調査等の保護措置を要する遺構・遺物は洪水により既に破壊され残存していないものと判断した。

2　調査の方法

調査区は標高約22.0ｍの水田中にある。調査区は四隅がそれぞれ東西南北に向き、一辺13.0ｍの正方形である。発掘調査にあたっては、まず重機により現在の耕作土である表土を除去した。その後に測量会社に委託して国家座標第Ⅶ系Ｘ75990.779・Ｙ11950.502をＸ10・Ｙ10地点として基準杭の設定を行った。グリッドは、南北方向にＸ軸東西方向にＹ軸を設定し、２ｍ四方を一区画とし、包含層中の遺物はこの区画ごとに取り上げた。基準杭の設定の後、人力により包含層掘削・遺構検出・遺構掘削の順で作業を行った。調査区全体の平面図は、水糸で地面に１ｍ間隔のグリッドを設定し調査員が実測して作成した。



第２図　発掘調査地区の位置と区割（1：2,500）

Ⅲ　調査の結果

1　層　　序（第２・３図）

厚さ15～30cmの現水田耕作土（１層）から地山面（７～９層）の間に５層（２～６層）がある。２～４層は灰色砂質ロームでオリーブ黒色または黄橙色砂質ロームなどが斑状に混ざっている。東隅を除く壁のほぼ全周にみられ、厚さ平均15cm前後である。上部に位置する２層は砂土のラミナが確認できることから、洪水の痕跡と思われる。５層・６層はオリーブ黒色砂質ロームで、中世、古代、古墳時代前期及び終末期、弥生時代中期の遺物包含層である。壁のほぼ全周にみられ、厚さは10～40cmである。この様に複数時期の遺物を含む層であるが、明確な堆積時期の区別はできなかった。７～９層はオリーブ黒色砂質土で地山である。遺構の検出は地山上面で行った。

地山面のレベルは21.50m前後であるが、東側中央付近が最も高く（21.50m）なり、西隅が最も低く（21.35m）なる。

2　遺　　構

遺構は出土遺物と重複関係及び埋土の検討からから弥生時代中期と古墳時代終末期の２時期に大別される。

(1)　弥生時代中期の遺構（第５図）

弥生時代中期に属する遺構は土坑２基・穴１基がある。

SK17　掘形は長軸3.19m、短軸2.88mの隅丸方形で、深さは15～20cmを測る。床面は締まりが無く、立ち上がりは緩い。埋土は黒色砂質シルトの単層。埋土内及び床面からは弥生土器（１～４）と縄文土器が出土している。

SK18　幅1.5m以上、深さ10cmの土坑。埋土はオリーブ黒色砂質ロームで、弥生土器片が出土している。

SK25　南東壁やや東寄に位置する小穴。南側上端は調査区外となり、掘形は長軸80cm以上、短軸65cmの楕円形を呈する。深さは40cm。埋土はオリーブ黒色砂質ローム。

(2)　古墳時代終末期の遺構（第４・５図）

古墳時代終末期に属する遺構には掘立柱建物１棟、井戸１基、柱列１、穴２がある。

掘立柱建物　SP01～16からなる南北棟の掘立柱建物で北西角は北壁にかかり調査区外となる。建物の主軸方向は北から西へ約８°振れている。東西４間、南北５間で、桁行柱間総長約8.0m、梁行柱間総長約6.3mである。床面積は、50.4m²である。柱穴掘形は径55～90cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さ30～58cmである。柱穴の埋土は、地山土ブロックが混じるオリーブ黒色砂質ロームの単一層で、柱根およびその痕跡は確認できなかった。柱間は変則的で、東側桁行柱間寸法は北から1.9m、1.2m、1.8m、1.2m、1.9m、南側梁行柱間寸法は東から1.8m、1.35m、1.35m、1.8m、西側桁行柱間寸法は南から1.9m、1.2m、1.8m、1.2m、北側梁行柱間寸法は1.35m、1.8mとなっている。

SP2・5・10・11から土器片が出土している。

SK19　掘立柱建物の西側で調査区西隅に位置する素掘りの井戸。掘形は短軸1.57m・長軸1.42m以上の楕円形を呈する。深さは70cmを測り、湧水層に達している。埋土は黒色砂質ローム。埋土中からは須恵器・土師器・製塩土器・礫が多量に出土した。

SP20・SK21・SK22　掘立柱建物の南東に位置する柱列。２間分を検出した。柱間は1.8mである。方位は東から北へ25.5°振れる。掘形は0.6×0.4mの方形を呈する。掘形の深さは0.4～0.5mで礫層に達する。埋土は、すべて黒色砂質ロームの単層。

SK23・SK24　掘立柱建物の東側に位置する柱穴状の穴。１間分しか検出していないが、柱列の可能性がある。掘形はSK23が55×28cm、SK24が68×32cmの馬蹄形を呈する。深さはSK23が22cm、SK24が17cmで、埋土は黒色砂質ローム。

3　遺　　物

遺物は遺構埋土及び５・６層中から出土し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、珠洲がある。

⑴　**SK17出土遺物**（第６図１～４）

１は平底の壺体部下半。内面に横方向のハケメを施し、外面は横方向のハケメの後縦方向のミガキを施す。底径6.6cm、胴部最大径23.6cm。２は口縁端部に面取りをする壺の上半部で、内面にハケメ、口縁及び頸部外面に縦方向のハケメを施す。口径11.8cm、頸部径8.2cm。３は口縁部が大きく開き、端部が指先の押圧で細かい波状になる甕。口径20.0cm。口縁内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメを施す。４は鉢で口縁端部が強く外反する。口径13.6cm。

これらの土器は、３の口縁部形態等から弥生時代中期中葉（小松式期）［増山1989］に属すると思われる。

⑵　**SK19出土遺物**（第６図５～28）

須恵器（５～７）　５は天井部から口縁部にかけて丸くなだらかな形態の杯蓋で、口縁端部は丸くなる。口径14.0cm。頂部外面はヘラキリ後ナデ調整をする。６・７は無蓋高杯と思われる。６は杯部で、外面下部に櫛状工具による刺突文を施す。口径13.6cm。７は長方形の透かしがつく高坏の脚基部。基部径3.4cm。

土師器（８～18）　８・９はくの字形口縁の甕。８は真っ直ぐ外方に開く口縁部と、肩の張らない体部をもつ。口縁部から体部の内外面は縦方向のハケメの後、横方向のミガキで調整する。口径は17.8cm、頸部径15.8cm。９は外反する口縁とやや肩の張る体部をもつ。口径16.2cm、頸部径12.8cm。体部内面はハケメの後ナデ調整、外面は縦方向のハケメ調整を施す。頸部から口縁部の内面にはハケメ調整の後ナデ調整、口縁部外面に横方向のハケメの後ナデ調整を施す。11は平底の底部で、内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメを施す。

10・12は甑と思われる。10は口径20.4cmで、体部外面に縦方向のハケメ調整、内面に横方向のハケメ調整を施す。12は体部内面にはケズリ調整、外面に縦方向の粗いハケメを施す。13・14は甑または鍋の把手と考えられる。15は高杯で、脚端部が大きく屈折し、外に開く。脚裾部径17.0cm。内面には横方向のハケメを施し、外面に浅い縦方向ケズリを施す。16は壺で、内湾気味に伸びる口縁部をもつ。口径12.0cm、頸部径9.0cm。17･18は内黒土器。17は高杯の杯部と考えられる。口径15.8cmで内面に段がある。内面は縦方向のミガキを施す。外面はハケメの後ナデ調整を施す。18は椀で、底径6.6cm。内面に縦方向のミガキを施す。外面は粗いミガキを施す。

これらの遺物は古墳時代終末期に属すると考えられる。詳細は次章で検討することとしたい。　（岡本）

製塩土器（19～28）　いずれも口縁部がラッパ状に広がり、棒状尖脚の能登式製塩土器と思われるが、底部は１点も出土しなかった。以下、口縁部と内外面の調整方法で分けて記述する。

19：口径11cm。口縁端部を外側に折り返して指で整えた後にヘラ状の工具で押さえ平たく面取りする。外面は口縁部下から全面にハケメ調整をし、内面はナデで仕上げる。**20・23**：口縁端部の収め方は19と同じである。20は外面をハケメ調整の後、粘土のつなぎ目が消えるまで丁寧にナデで仕上げ、内面もナデで仕上げる。口径12cm。23は外面をケズリ調整の後、20と同様に仕上げ、内面もナデで仕上げる。**21・24**：口縁端部の収め方は19と同じである。外面はケズリ調整を行い、内面にはヘラ状の工具を放射状にあてた痕跡がみられるが、その後にナデで仕上げる。21は口径10cm。**22**：口縁端部・外面の調整は21・24と同じであるが、内面に工具を用いない。口径13cm。**25**：口縁部は指でつまんで仕上げ、それによりはみ出た部分を外側に折り面は取らない。口縁端部の断面は三角になる。外面はハケメ調整した後にナデ、内面はナデ調整。**26**：口縁端部は外側に折り返したのみで丸めずにそのまま押さえて面を取る。外面の口縁部下からケズリ調整、内面はナデ調整。**27**：外面を口縁部下からケズリ調整をし、内面はナデ、口縁部は指押さえで仕上げるため薄くなる。**28**：口縁端部に面を取り丁寧に整える。口縁部断面は四角くなる。外面には工具を用いた痕跡があるが内外面ともに丁寧にナデで仕上げる。　（境）

⑶　包含層出土遺物（第７・８図）

縄文土器(29～35)　縄文土器は、そのほとんどが小片である。時期は30･31･33～35が晩期の中屋式期に比定でき、29･32は後期～晩期と思われる。29は深鉢の破片で、ゆるく外傾する器形の口縁部に近い部分である。30は深鉢の胴部破片である。31は口縁部が「く」の字状になり胴部が緩く張り出す深鉢の胴部破片で、文様は変形した鍵の手文の一部分である。中屋Ⅱ式期に比定できる。32は円筒形の深鉢の口縁部である。33は深鉢の胴部破片で縄文地に沈線を施す。34は深鉢の胴部破片で、細かなＬＲ縄文を施す。35は深鉢の胴部破片で貝殻条痕文を施す。（境）

弥生土器（36～40）　36は壺の体部。底径7.2cm、体部最大径18.4cm。体部内面は横方向のハケメの後ナデ調整をしてハケメを消す。体部外面は横方向のハケメの後縦方向のミガキを施す。37は外反する口縁部の甕。口縁端部外面にヘラによるキザミ目を施し、口縁部内面にはヘラ先により綾杉文を施す。体部内面は縦方向のハケメの後ナデ、外面は縦方向のハケメの後横方向のハケメを施す。38～40は平底の底部。36～40は、弥生時代中期中葉に属すると思われる。

古墳時代の土師器（41～48・55～64）　41・42は有段口縁壺の口縁部。41は、口径17.6cm、頸部径10.6cmで、口縁部内外面ともに横方向のハケメ調整の後ミガキを施す。42は口径29.8cm、頸部径9.6cmで、口縁部内外面とも横方向のハケメの後ミガキを施す。体部外面は横方向のハケメ、内面はナデ調整を施す。43は42の底部で、平底を呈す。底径5.0cm。外面に横斜位方向のハケメを施す。42・43はＸ８Ｙ８区から纏まって出土した。44・45・55～58は甕。55はくの字に外反する口縁部に卵形の体部、小さな平底の底部をもつ。口径17.0cm、頸部14.9cm。底部内面は放射状にハケメを施す。体部内面はナデ調整をし、外面は縦方向のハケメ、頸部付近外面は横方向のハケメを施す。底部を除く外面に煤が付着している。Ｘ８Ｙ９区集中出土。57もくの字形の甕の口縁部から体部。口径16.0cm、頸部径13.4cm。体部内面はナデ調整し、頸部内面に横方向のハケメを施す。体部外面は横斜方向のハケメ調整、部分的にケズリ調整を施す。44・45・56は甕の口縁部。44は口縁端部を面取りする。口径18.0cm。外面に縦方向のハケメを施す。45は有段口縁で、内面の段は顕著ではない。56は端部を丸く収める口縁部形態で、頸部外面にハケメを施す。58は卵倒形の甕の体部。体部最大径は22cm前後。内面はハケメ調整の後ナデる。外面は上半部は縦斜方向のハケメ、下半部は縦斜方向のケズリを施す。46･47は鉢。46はやや外反する有段口縁状の口縁と小さな底部の鉢。口径18.6cm、器高8.2cm。口縁部は内外面とも横斜位のミガキを施す。体部は内外面とも縦方向のミガキを施す。47は有段気味の口縁をもつ。口径12.0cm。外面は縦斜方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施す。48は内湾気味の口縁をもつ小型の器台。口径7.8cm、脚基部径3.2cm。外面全体と受部内面はミガキ調整の後赤彩をする。脚部内面は横方向のハケメを施す。

59は口が垂直に立ち上がり、丸い肩の壺。口径10.2cm。体部内面はナデ調整を施し、外面は横方向のハケメ調整の後、粗いヘラミガキを施す。Ｘ７Ｙ７区集中出土。60・61は同一個体で、長い体部の甕である。60は、内面に横方向のハケメ調整、外面は縦方向のハケメ調整を施す。61は、平底から立ち上がる体部で内面に横方向のハケメ調整、外面は縦方向のハケメを施す。62は把手。63は高杯の杯部か。口径18.6cm。内面に縦方向の粗いミガキを施す。64は手捏。

41～48・55～58は、４世紀から５世紀［田嶋1996］に属すると思われる。59～64は、SK19と同時期と思われる。

古墳時代の須恵器（49～54）　49は杯蓋。天井部外面にはヘラケズリを施す。50は有段口縁の壺。口径15.0cm。51は鐙の有段部で１条の沈線を施す。52は壺または提瓶の口縁部。口径10cm。口縁部外面に２条の沈線を施す。53は壺体部下半。体部に２条の沈線があり、体部底部付近はヘラケズリを施す。54は甕の体部破片。

SK19と同様に古墳時代終末期に属すると考えられる。（岡本）

古代・中世の遺物（65～68）　65は須恵器甕の底部に近い部分の破片である。66は土師器の小型甕の口縁部で、口径は15.4cm。口縁端部を内側に巻き込むタイプのものであり、時期は９世紀末～10世紀初め頃か。67・68は、珠洲の甕の体部破片である。叩き目から67が13世紀代、68が14世紀代のものとする。（境）

Ⅳ　まとめ

SK19出土土器の時期　須恵器杯蓋（５）は口径14.0cmで、口縁端部は頂部外面はヘラキリである。また須恵器無蓋高杯の体部には櫛歯による刺突文帯（６）、脚基部に長方形の透かしがみられる。これらの特徴を持つ須恵器は、県内の窯跡では大門町石名山２号窯跡［池野他1986］、小杉町小杉流通業務団地内（以下流団とする）№７遺跡第１～５号窯跡［上野他1982］等がある。これらの窯跡は田辺編年ではＴＫ43型式［田辺1981］、中村編年ではⅡ型式５段階［中村1981］にあたるものと考えられる。一方、土師器は粗雑化された黒色処理の土器、甑がみられる。田嶋明人氏によれば、黒色処理の盛行や甑は同氏の編年「４様式Ⅱ期」［田嶋1996等］の特徴とされている。

以上のことから、SK19出土土器群は６世紀末から７世紀初頭の年代が与えられよう。

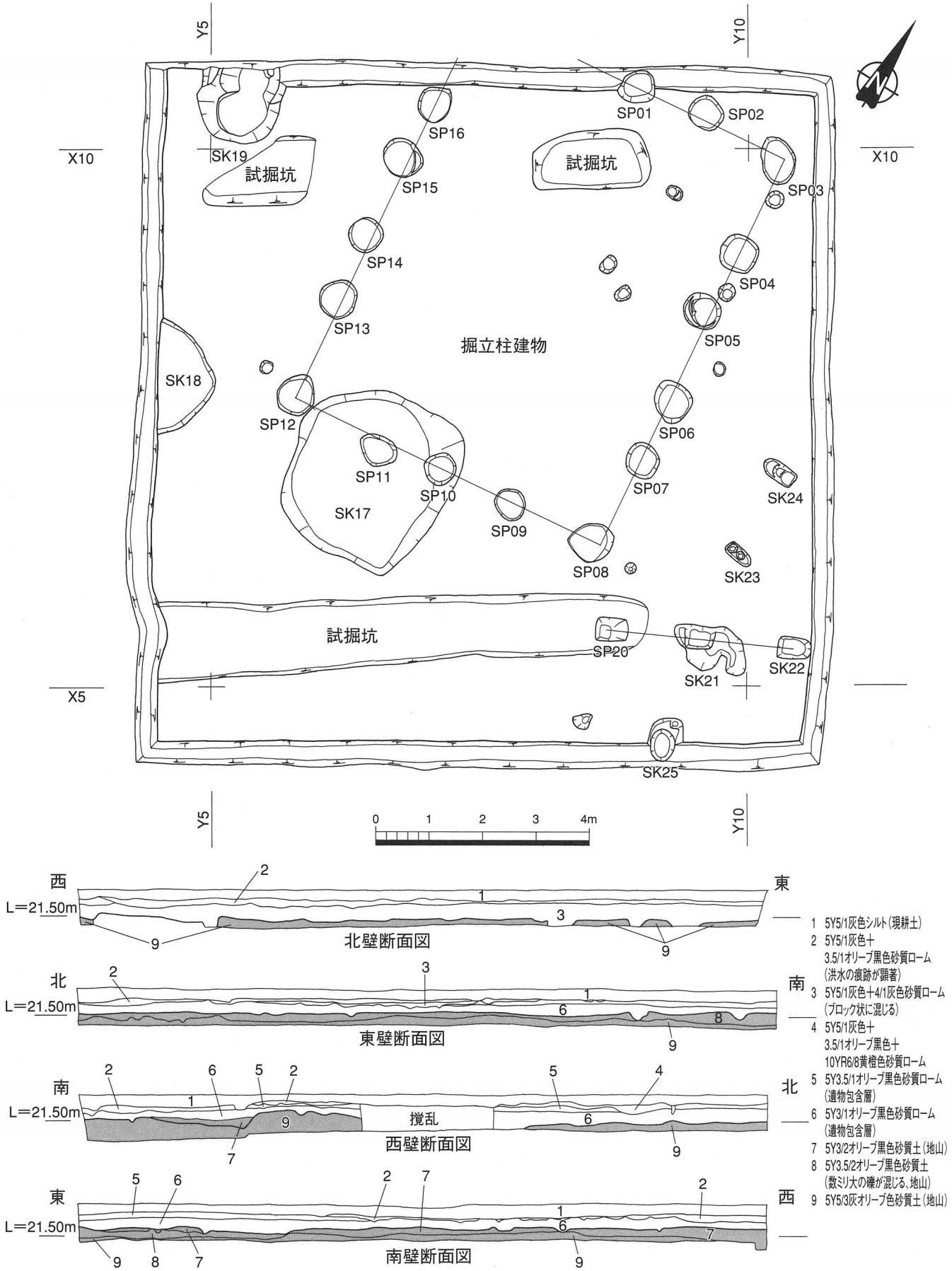
利田横枕遺跡の集落について　今回の調査では７世紀初頭の掘立柱建物と井戸が検出された。また、立山町教育委員会調査区では７世紀初頭の竪穴住居３棟と掘立柱建物１棟が検出されている［三鍋・田中2001］。越中における７世紀初頭の集落は、流団№６遺跡［上野他1982］、同№７遺跡［上野他1982］、小杉町上野遺跡、上野南Ⅰ遺跡［池野他1991］、高岡市麻生谷新生園遺跡［山口他1997］等で調査されている。流団№６遺跡・同№７遺跡・上野南Ⅰ遺跡の集落は、掘立柱建物と竪穴住居それぞれ複数棟で構成され、須恵器の工人集落とされている。この様に７世紀初頭の掘立柱建物は竪穴住居と共に集落構成の主体となっている。一方、５～６世紀の集落については、小矢部市五社遺跡［山本他1998］、同北反畝遺跡［伊藤・塚田1991］等、倉庫等を除き竪穴住居を主体として構成される。このように越中においては５～６世紀の集落と７世紀初頭の集落は構造原理が異なっているといえる。この変化については、石川県の状況ではあるが川畑誠氏の論考［川畑1995］がある。それは、６世紀末～７世紀中頃について「側掘立梁間３間を基軸とする掘立体系が一定以上の階層に普及する」等、前段階からの変化を抽出している。さらにこの変化が「宇野隆夫氏が提唱する推古王朝変革論に包括される動き」としている。川畑氏の説に従えば今回の調査で検出された４間×５間の掘立柱建物は、推古朝の有力豪族抑圧・中小豪族登用策［宇野1993］の一端とみることができる。しかし、この証明には周辺遺跡の調査の進展による更なる周辺の状況解明が必要である。　（岡本）

SK19出土製塩土器について　SK19からの製塩土器の出土量は、消費地における一遺構からのものとしては群を抜く多さである。これらの製塩土器は、能登から氷見にかけてのいずれかの生産地から搬入されたものと思われ、古墳時代終末期において当地に塩そのものが相当量供給されていたことを物語っている。

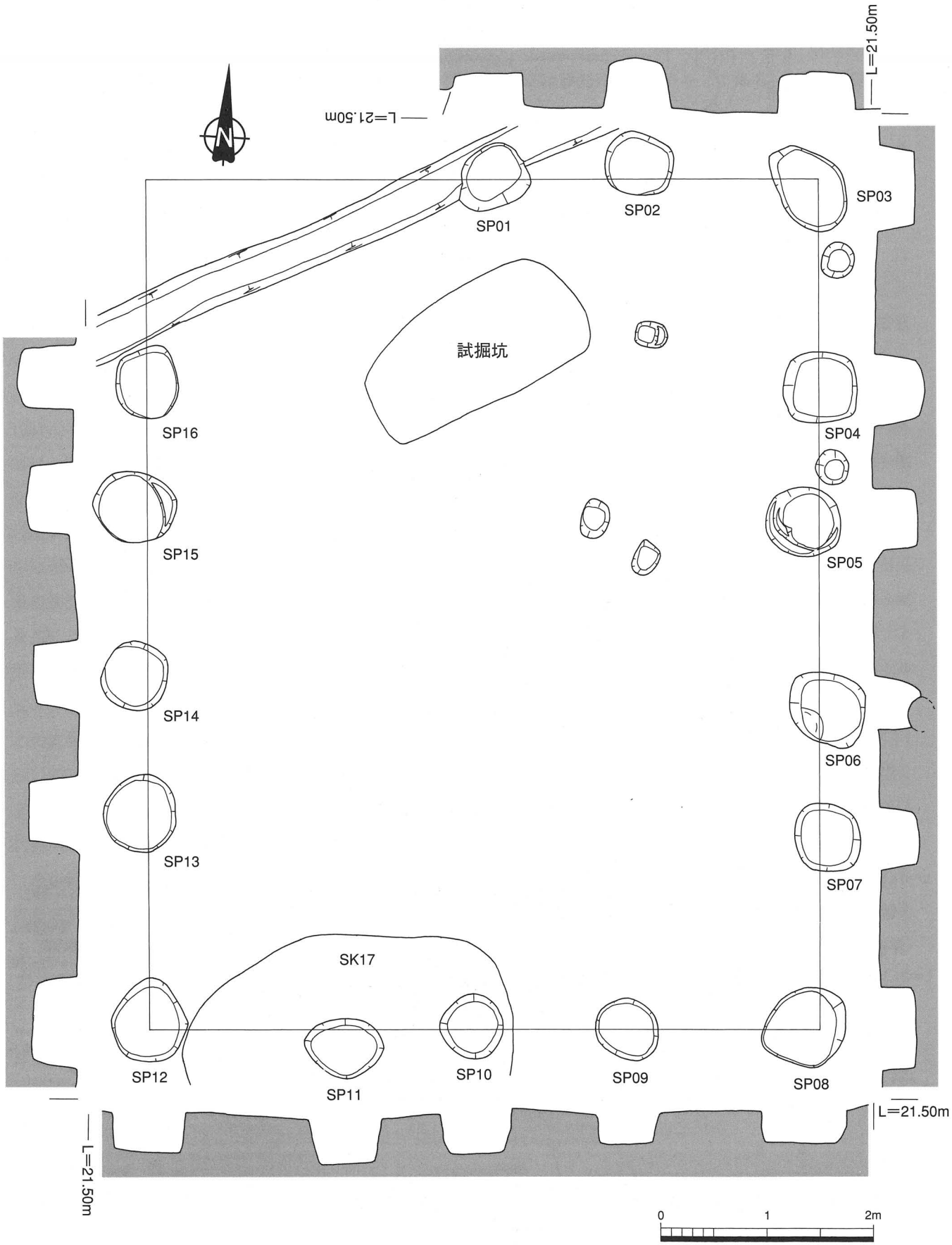
立山町教育委員会の調査地区に古墳時代前期・後期の集落が存在することや周辺の古墳に象徴される有力者層の存在などを見渡した場合、当時、塩を集落内において集中的に調達し、塩そのものかあるいは塩を用いた食料を供給することによって労働力を得、周辺の開発を精力的に押し進めていく社会的背景があったものと考える。　（境）

参考文献

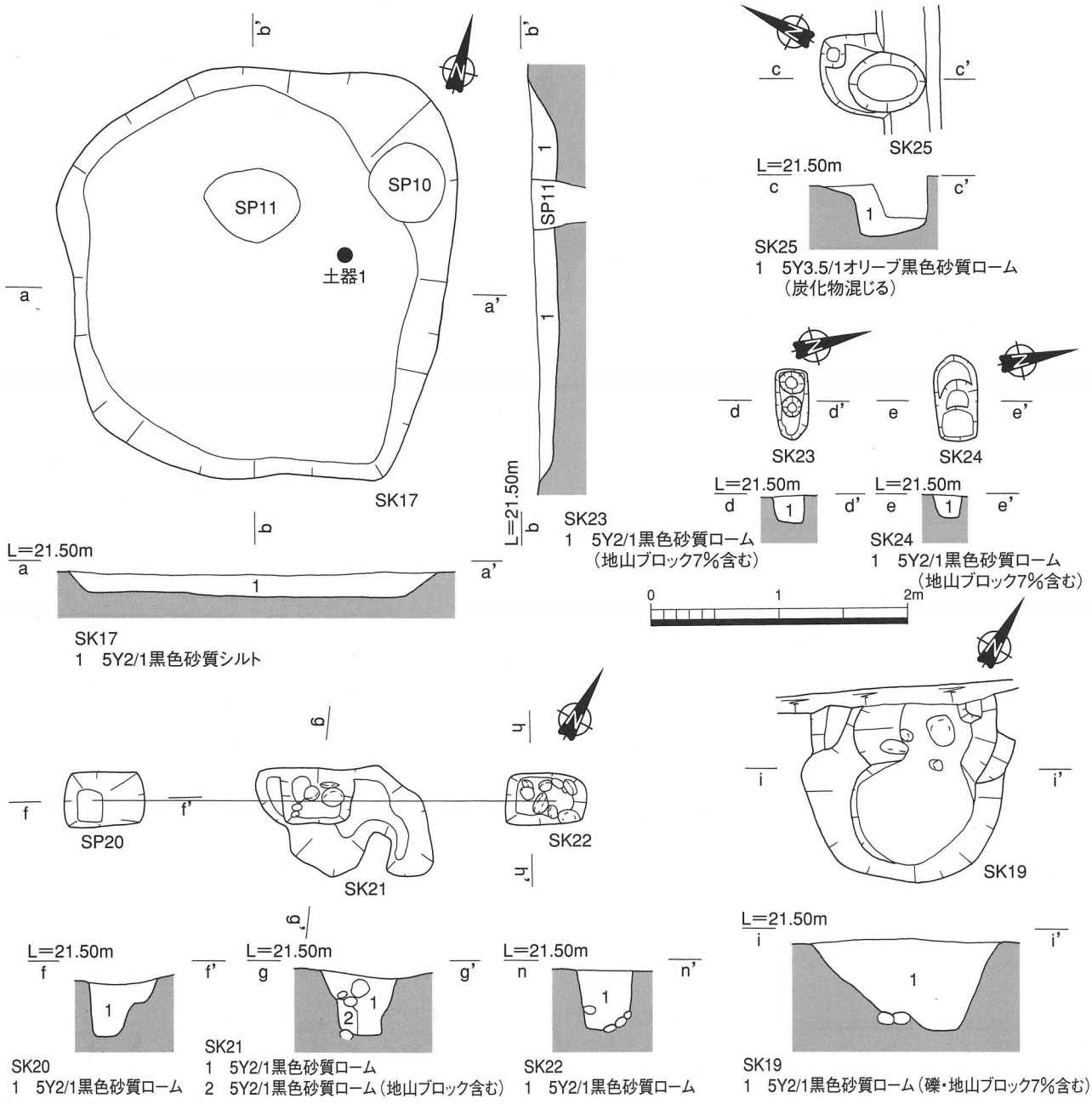
イ　池野正男・宮田進一・北川美佐子　1968　『石名山窯跡発掘調査報告』大門町教育委員会
　　伊藤隆三・塚田一成　1991　『富山県小矢部市　北反畝遺跡』小矢部市教育委員会
ウ　上野　章・狩野　睦・池野正男・宮田進一・久々忠義　1982　『富山県小杉町・大門町　小杉流通業務団地内遺跡群第３・４次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
カ　川畑　誠　1995　「石川県内の古代建物に関する基礎的考察－掘立柱建物の平面プランを中心にして－」『財団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報６　平成６年度』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
キ　岸本雅敏　1983　「富山県における土器製塩の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会
タ　高梨清志・越前慶祐　2000　『富山県舟橋村浦田遺跡発掘調査報告（３）』舟橋村教育委員会
　　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1988　『立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ』
　　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1989　『立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ』
ト　戸澗幹夫　1983　「能登式製塩土器－型式分類とその変遷－」『北陸の考古学』石川考古学研究会
ナ　中村　浩　1981　『和泉陶邑窯の研究』柏書房
マ　増山　仁　1989　「小松式土器の再検討」『北陸の考古学』Ⅱ　石川考古学研究会
ミ　三鍋秀典・田中幸生　2001　『利田横枕遺跡』立山町教育委員会
ユ　湯尻修平・中野　壽・邑本順亮・関森香住　2000　『無関カキノウラ遺跡』能登島町教育委員会
タ　田嶋明人　1996　「北陸の６世紀～７世紀初頭の土器」『日本土器事典』雄山閣出版
　　田辺昭三　1981　『須恵器大成』角川書店
ヤ　山口辰一・武部善光・高柳正春　1997　『麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡』高岡市教育委員会
　　山本正敏・岡本淳一郎・中川道子・三島道子　1998　『五社遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ－』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所



第３図　遺構配置図（1/100）

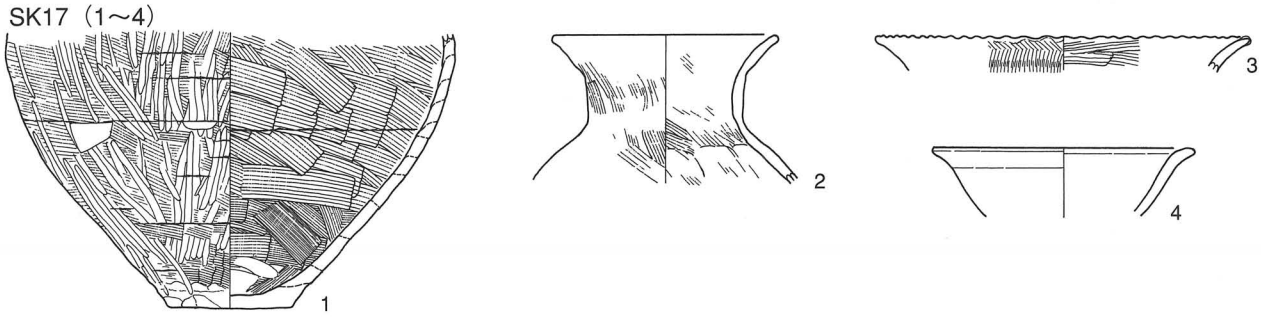


第4図　掘立柱建物実測図（1/50）

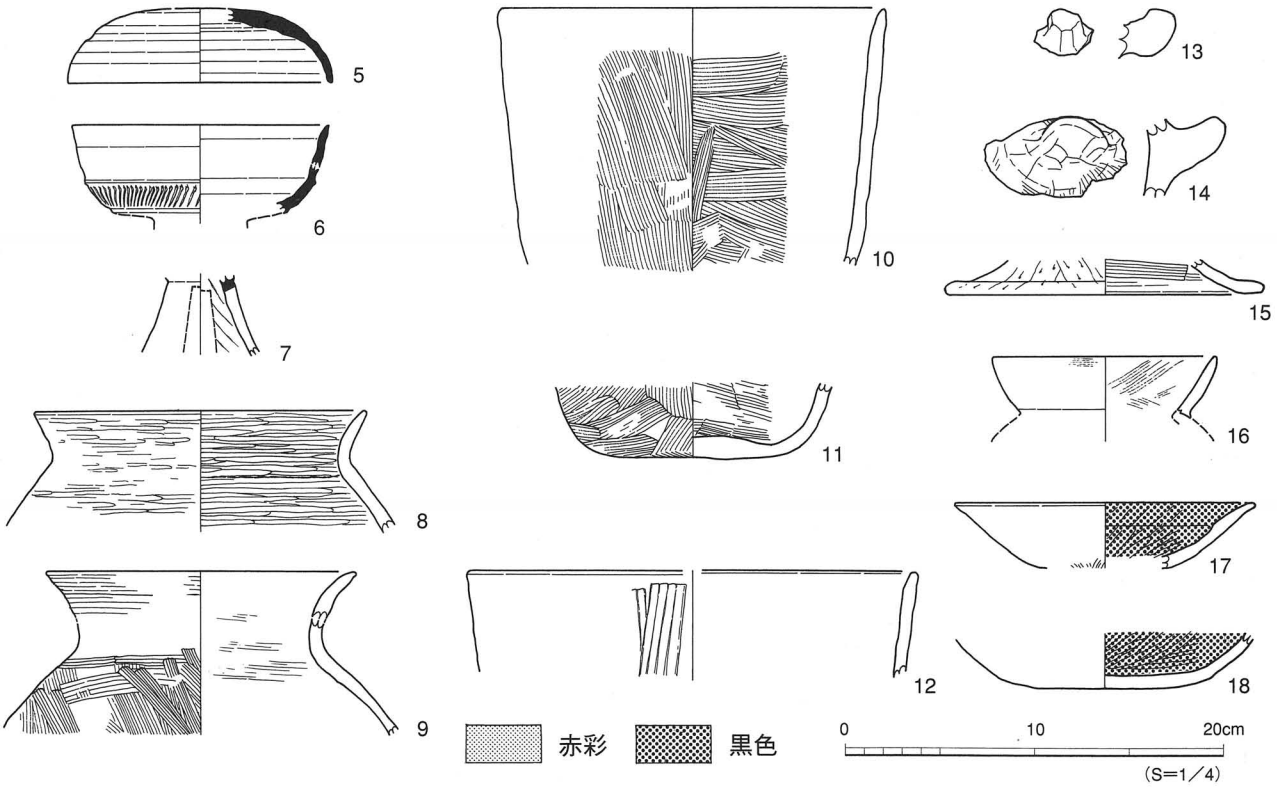


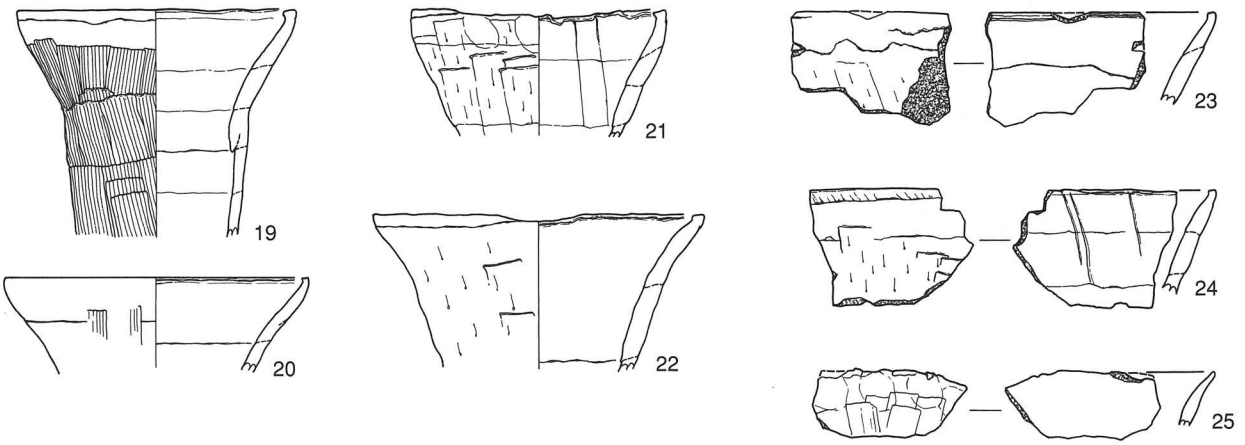
第5図　遺構実測図（1/50）

SK17（1～4）



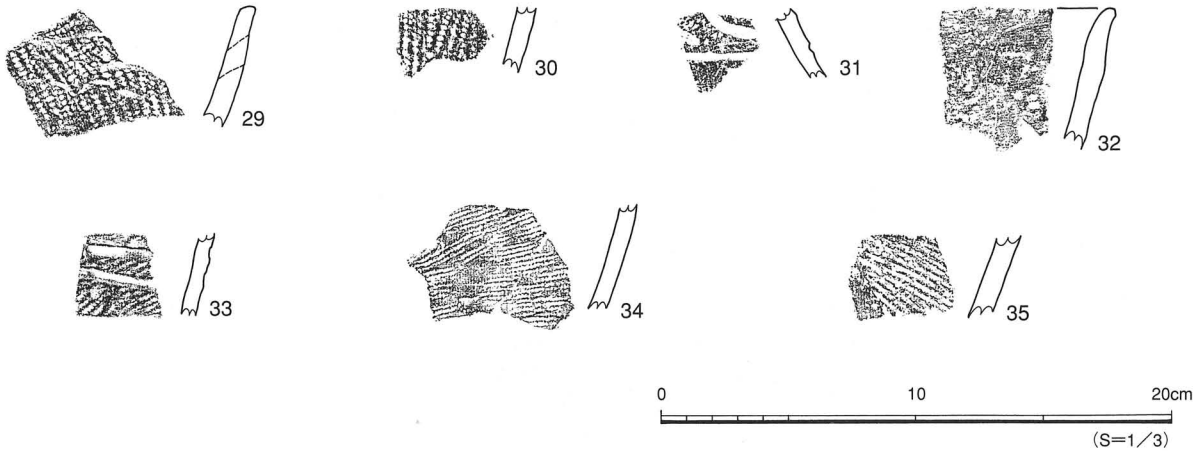
SK19（5～28）

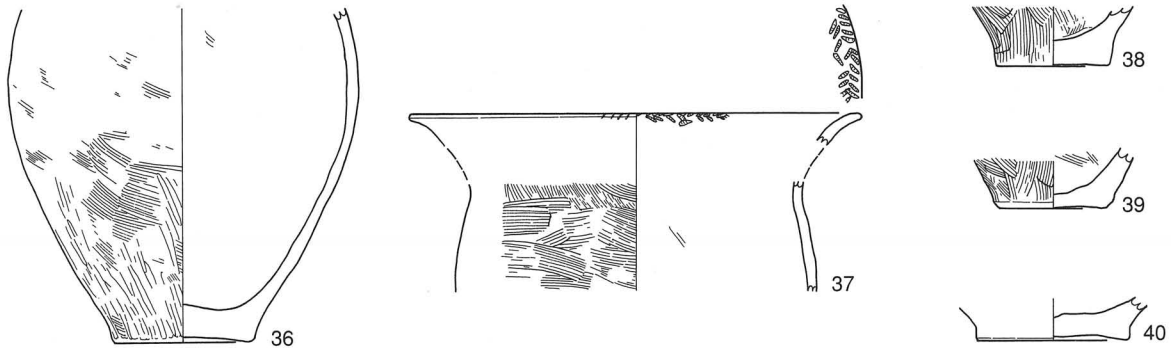


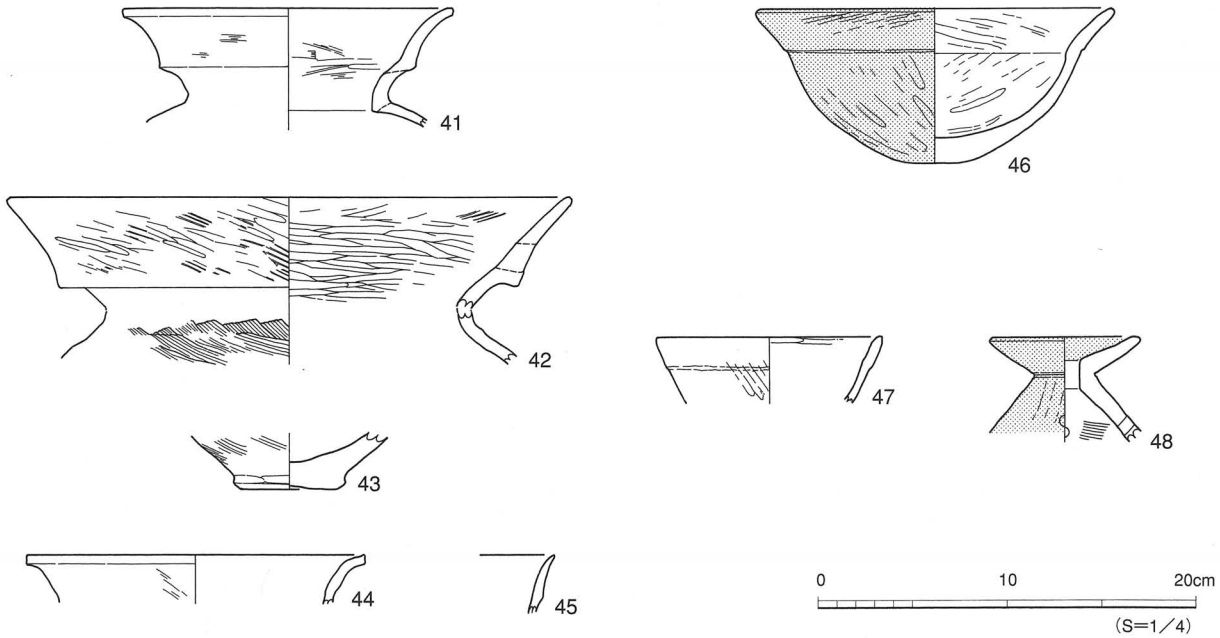


製塩土器

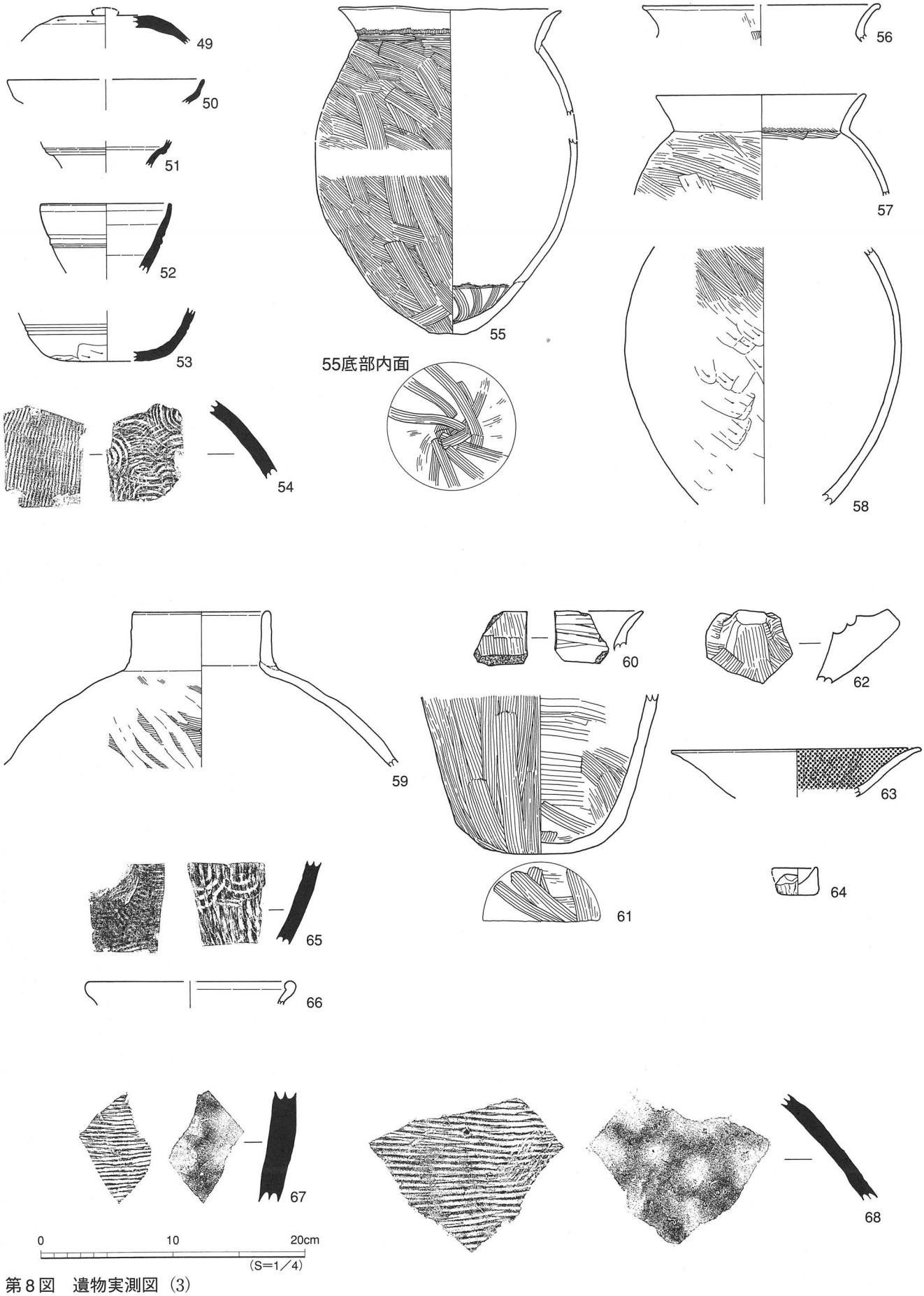
第６図　遺物実測図（1）


29
30
31
32
33
34
35
0
10
20cm
(S=1／3)


36
37
38
39
40


41
42
43
44
45
46
47
48
0
10
20cm
(S=1／4)

第７図　遺物実測図（2）

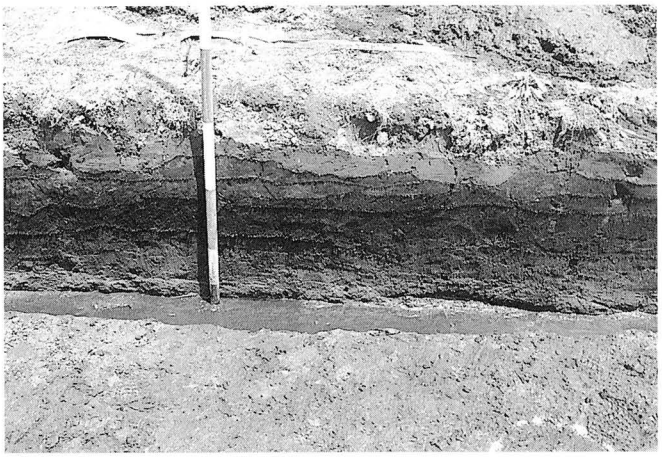

49
50
51
52
53
54
55
55底部内面
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
0
10
20cm
(S=1／4)

第８図　遺物実測図（3）

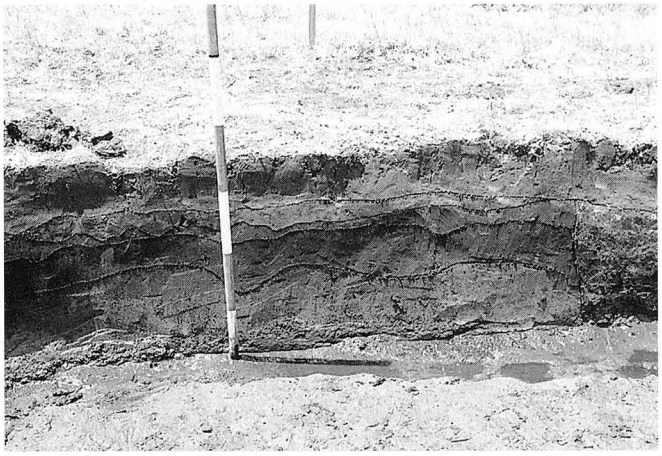
調査区全景（南より）

掘立柱建物（東より）

写真図版2



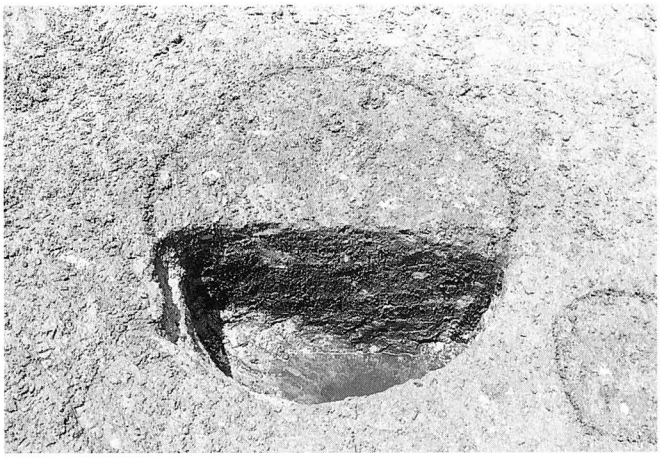
調査区基本土層（東壁、西より）



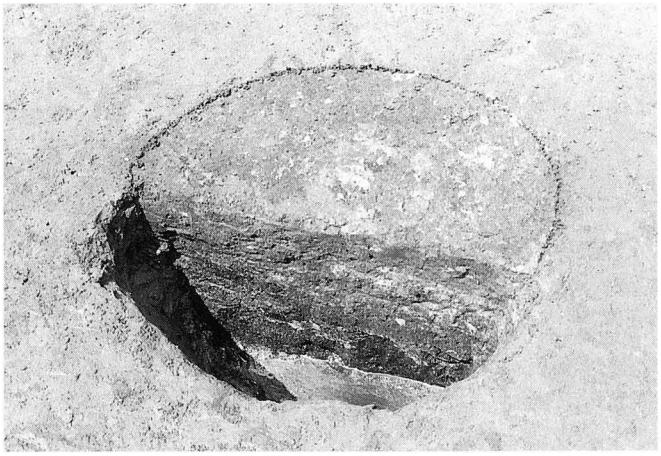
調査区基本土層（西壁、東より）

遺構検出状況（北より）

作業風景（北より）



SP05断面（東より）



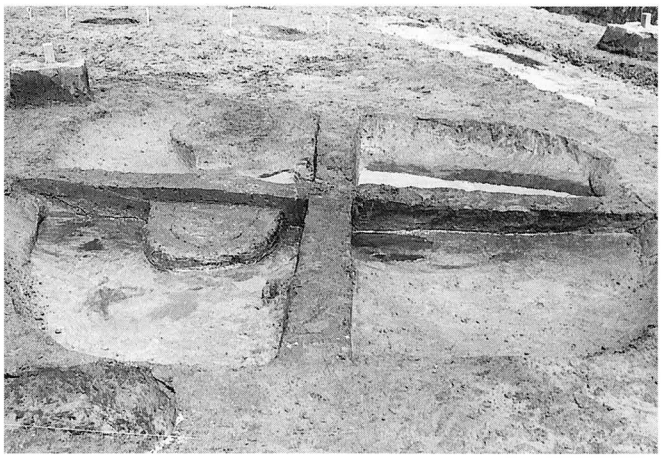
SP14断面（東より）

SK19断面（南より）

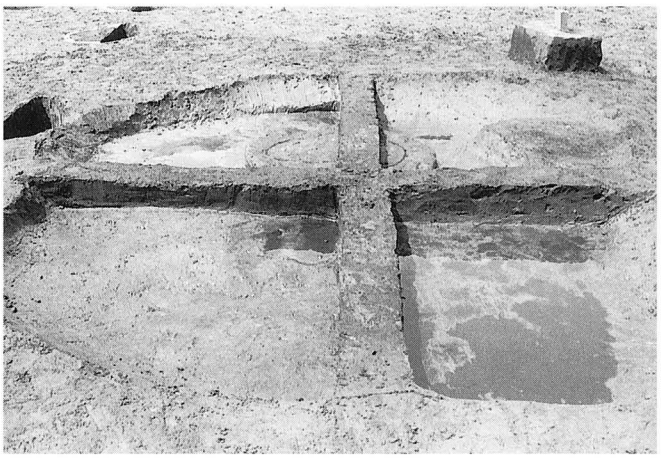
SK19完掘状況（南より）

SK19完掘状況（東より）

SK17土器（1）出土状況



SK17断面（西より）



SK17断面（南より）

SK17完掘状況（西より）

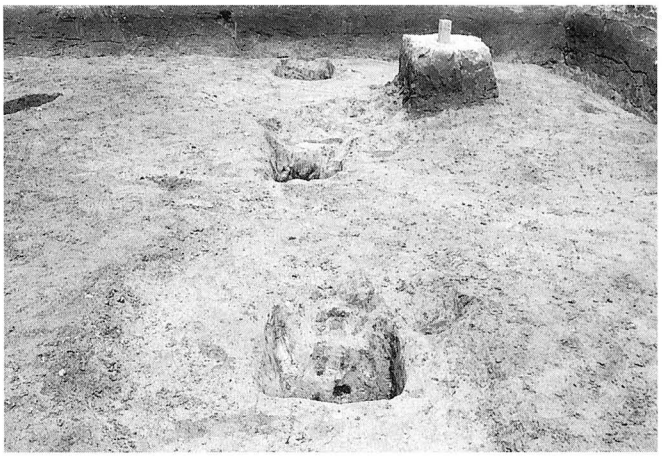
SK17完掘状況（北より）

SK21断面（西より）

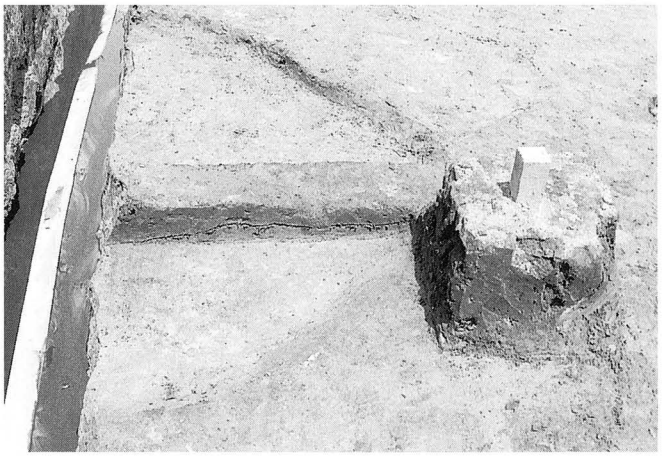
SK21石検出状況（西より）

SK22断面（西より）

SK22石検出状況（西より）



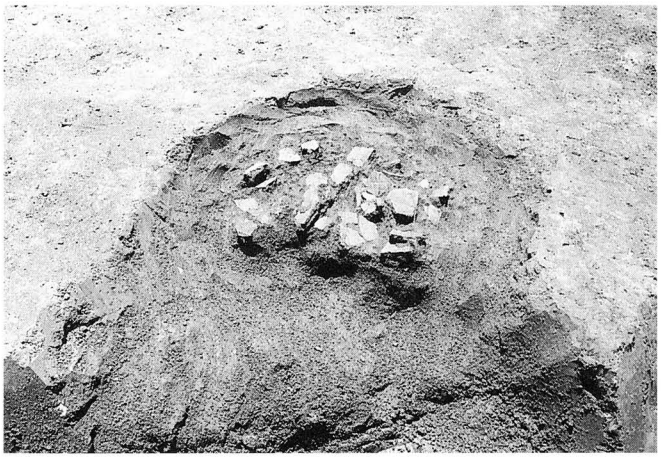
SK21～22完掘状況（西より）



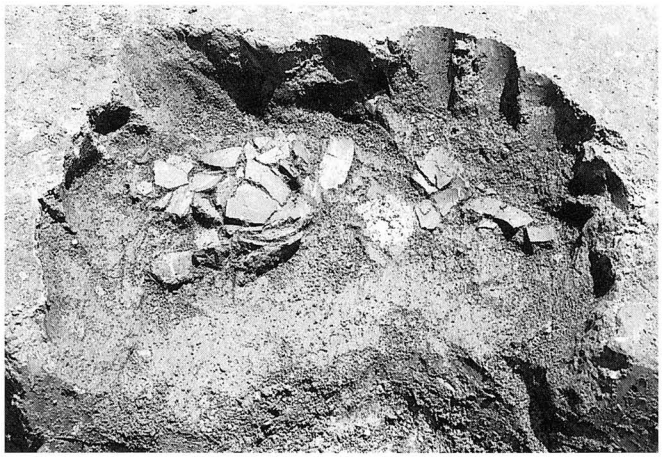
SK18断面（南より）

SK25断面（西より）

土器（42）出土状況



土器（59）出土状況



土器（55）出土状況

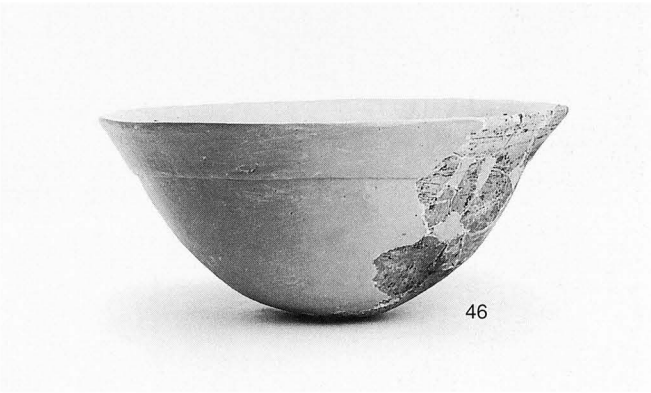
1

2

36

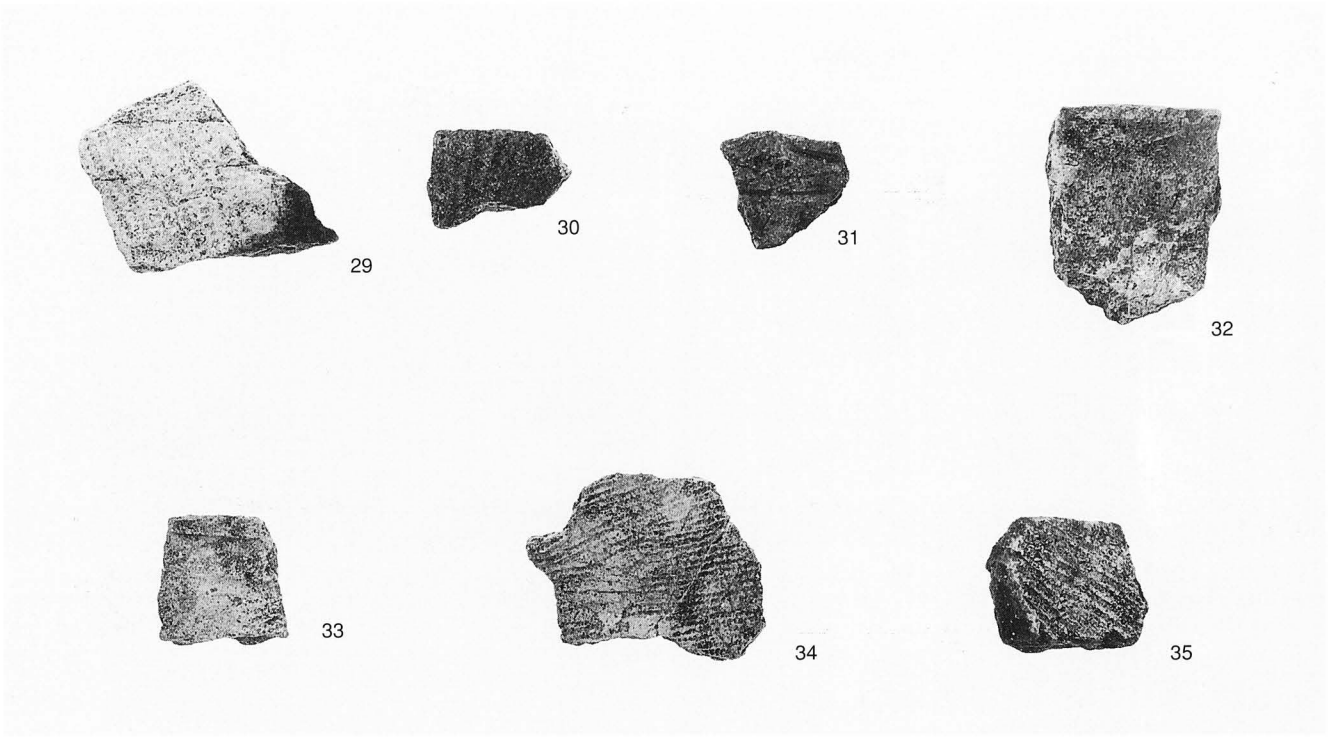
41

55

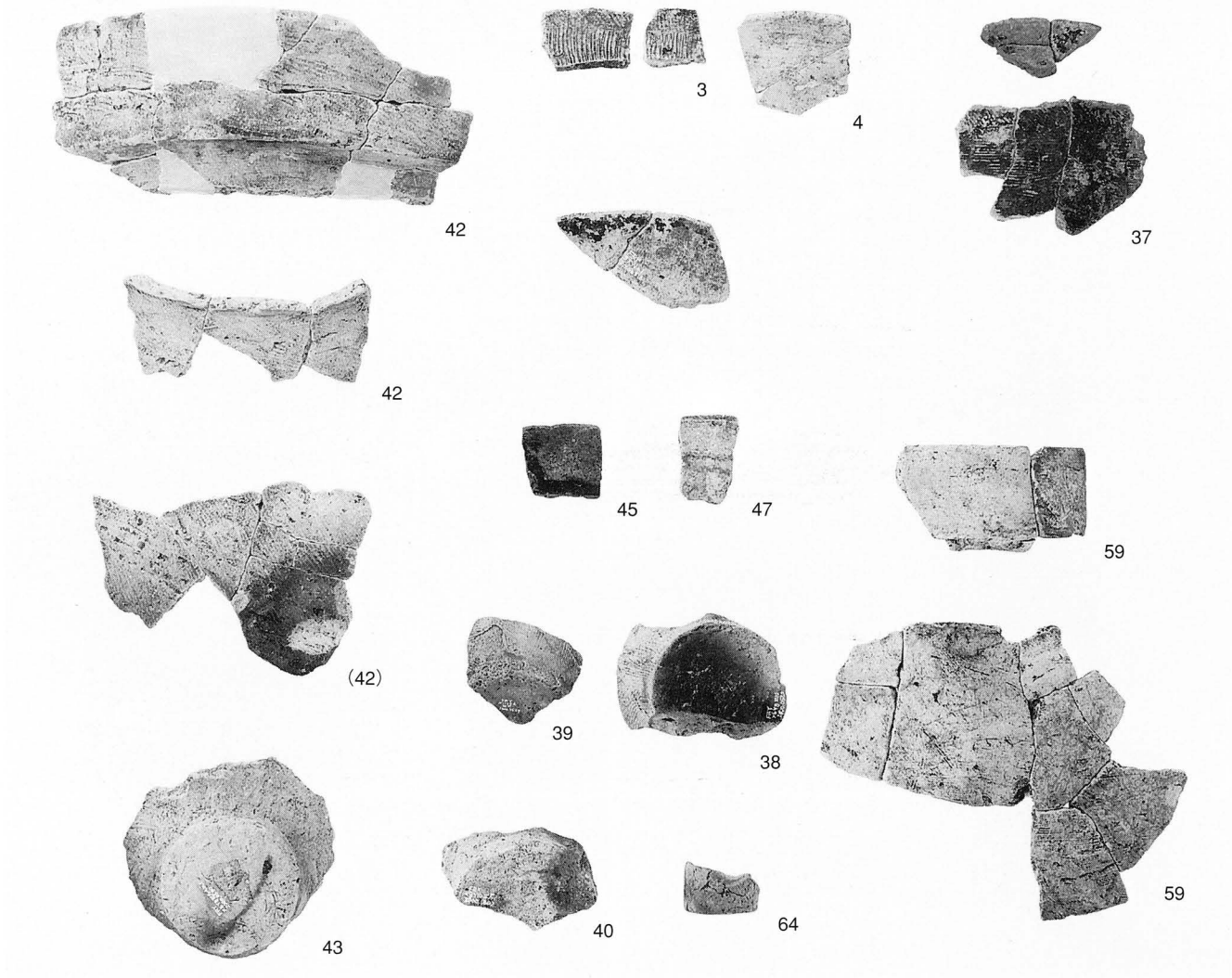

46

57

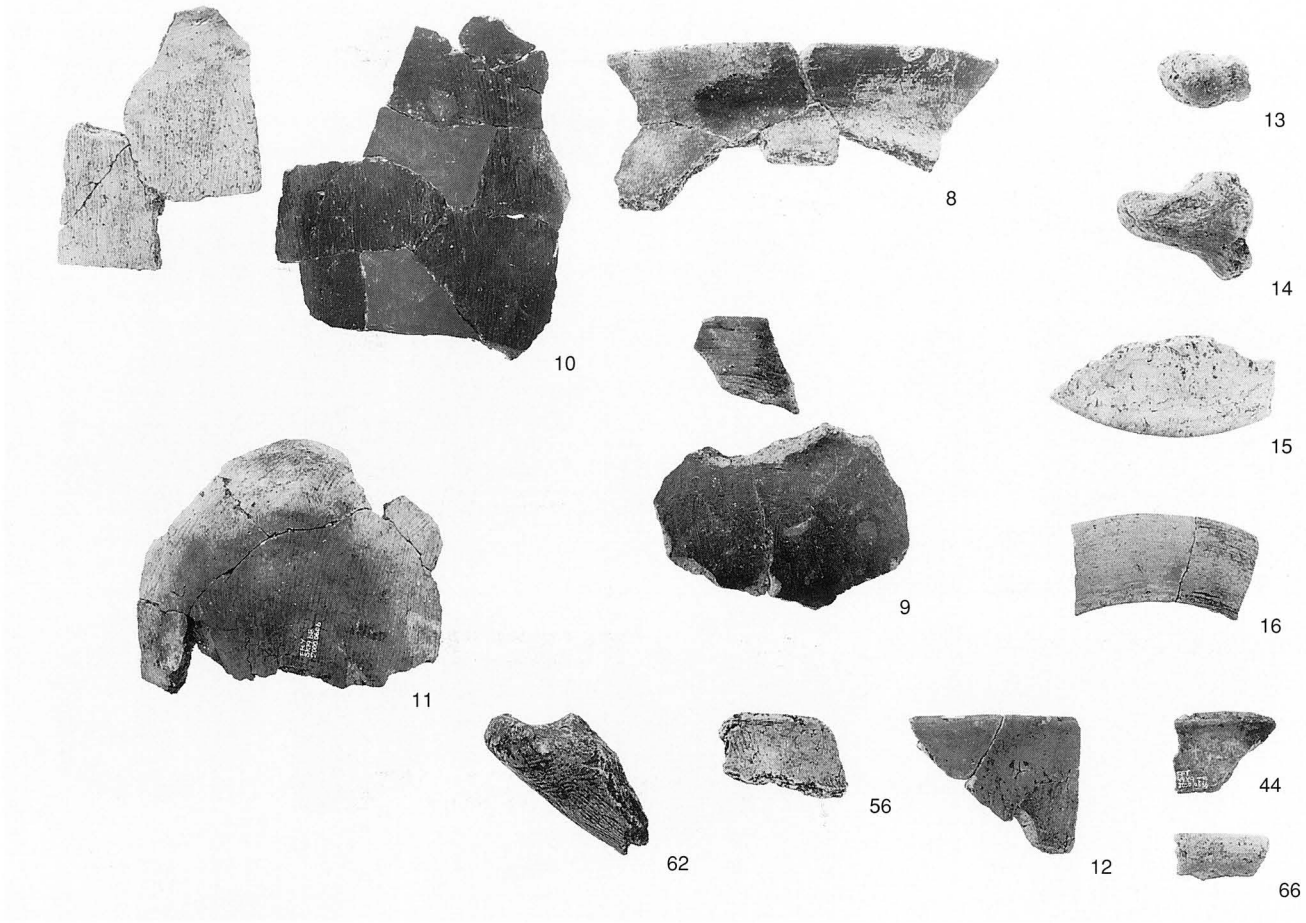
61



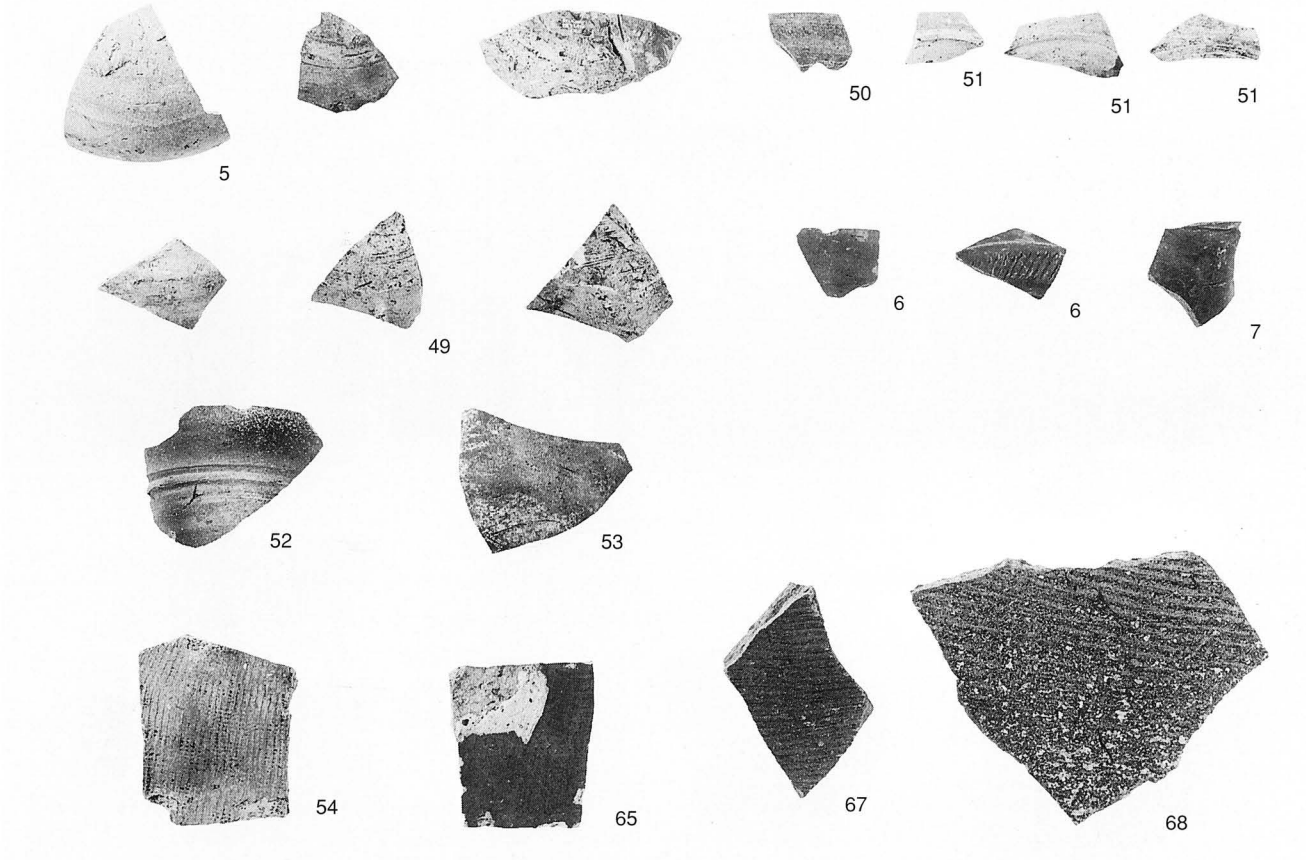
縄文土器



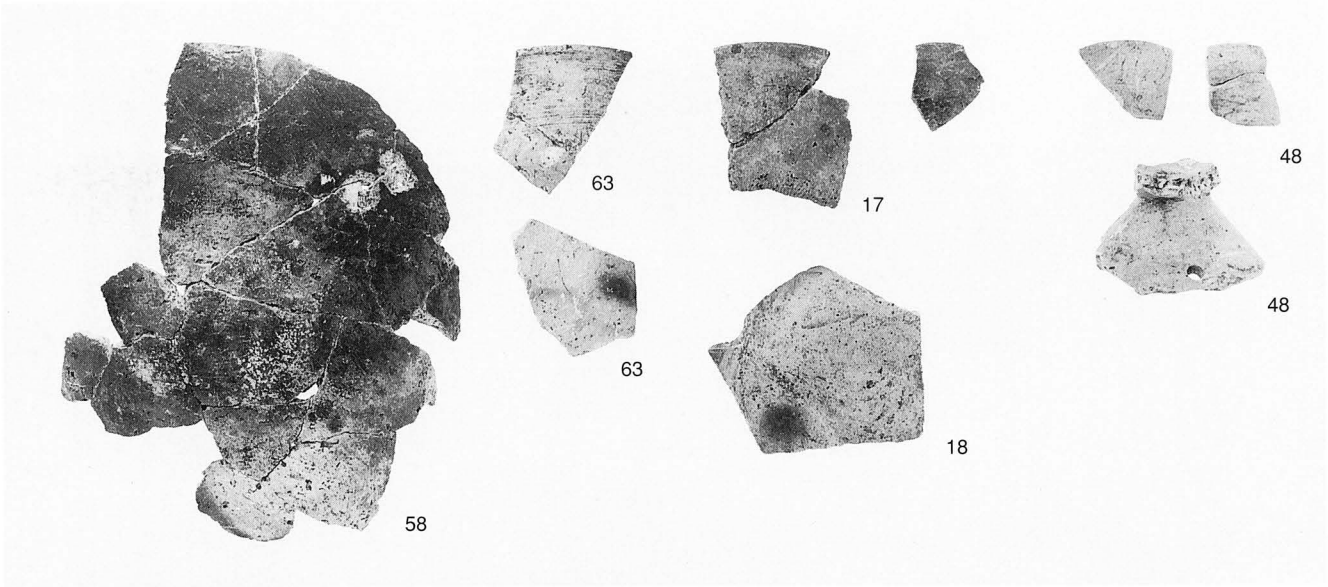
弥生土器・古墳時代土師器



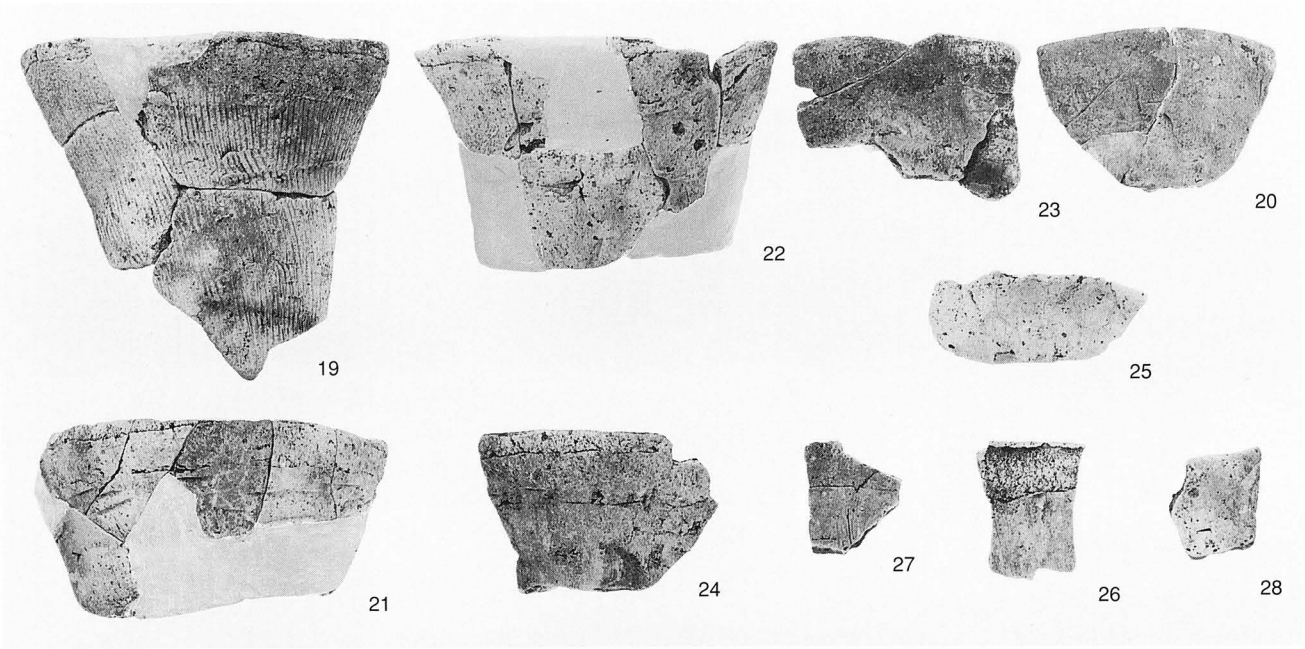
古墳時代土師器ほか



須恵器・珠洲



古墳時代土師器・内面黒色土器・赤彩土器



SK19出土製塩土器（上：外面、下：内面）

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふなはしむらりたよこまくらいせきはっくつちょうさほうこく
書名	富山県舟橋村利田横枕遺跡発掘調査報告
副書名	送電線鉄塔建替工事に伴う発掘調査報告
シリーズ名	舟橋村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	6
編著者	岡本淳一郎・境　洋子
編集機関	富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0115　富山県富山市茶屋町206-3
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
利田横枕遺跡 (りたよこまくらいせき)	富山県中新川郡舟橋村東芦原・立山町利田 (とやまけんなかにいかわぐんふなはしむらひがしあしはら・たてやままちりた)	16321 16323	011 008	36° 40′ 57″	137° 17′ 57″	20000529 ～ 20000612	169m²	送電線の鉄塔建て替え工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
利田横枕遺跡	集落跡	弥生時代中期・後期 古墳時代前期・終末期 古代 中世	土坑 掘立柱建物・土坑・穴	弥生土器 土師器・須恵器・赤彩土器・内黒土器・製塩土器 土師器・須恵器 珠洲	県内では稀少な古墳時代終末期の掘立柱建物を1棟検出。また、同時期の井戸からは製塩土器が多く出土。

舟橋村埋蔵文化財調査報告書6

富山県舟橋村

利田横枕遺跡発掘調査報告

－送電線鉄塔建替工事に伴う発掘調査報告－

発行日　2001年3月30日

編　集　富山県埋蔵文化財センター
〒930－0115　富山県富山市茶屋町206－3
ＴＥＬ（076）434－2814　ＦＡＸ（076）434－2859

発　行　舟橋村教育委員会
〒930-0295　富山県中新川郡舟橋村仏生寺55
ＴＥＬ（076）464－1121　ＦＡＸ（076）464－1066

印　刷　北日本印刷株式会社